The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	唐宋期越窯系青磁の研究
Author(s)	盧, 柔君
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69694
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　盧柔君　　）	
論文題名	唐宋期越窯系青磁の研究

論文内容の要旨

物質の交換は、抽象的な精神や思想を含めた文化をバックグラウンドとして、人間の往来や技術や概念の交流を内包する現象である。その過程においては無数の選択肢があり、最終の結果は関与している群体（各地域の社会や集団）の文化背景に左右される。貿易は物質交換の一表現形態であり、生産地と消費地の社会文化に決定されるものであるため、貿易実状の検討を通じて生産地と消費地の文化の関係性やそれぞれの独自性が解明できると考えられる。本論文は、特に東アジアの海域に活発な貿易時代をもたらした越窯系青磁に注目することにより、９・10世紀代における日本の越窯系青磁の消費形態が如何に文化的特徴を反映するのかを明確化することを目指したい。

日本では越窯青磁に対して多くの関心が向けられ、多くの分類・編年研究がなされた。一方、中国においても陶磁器への関心が高くなりつつ、近年では窯跡の発掘調査に伴うようにして、概観的ながらも生産地の編年研究が発達するようになった。しかし、貿易に関しては生産・流通・消費の一連の様相に注目する必要がある。日本において編年研究がある程度の到達点を見せてはいるものの、必ずしも十分に完成しているとは言えない。またその分類に基づいて、物質の流通や消費の側面に関して検討した事例は、現状ではまだ不足している。日本における越窯系青磁の分布状況に関しては、従来の研究において、本州と九州における精粗製品の量に差が認められることが指摘されてきた。しかし、その文化的意義は十分に指摘されていない。本論文では、容器の全体器形が消費者にとって重要であるという視点からアプローチし、青磁が生産者から消費者にまで移動する実状とその背後の社会文化的要因を分析した。

以下、本論文の全体構成と概要を述べたい。

序章では、貿易と文化が一体であるという観点から、初期貿易陶磁を研究対象とする理由を述べた。ここで同時に、いわゆる初期貿易陶磁の定義とその時代の概略の様相についても言及した。主な研究対象とされる越窯系青磁の定義に関する論争とそれぞれ意見の背後に支える観点を回顧した上で、本論文で「越州窯」の代わりに「越窯」の呼称を使った。「越窯系」青磁は、「越窯」製品と判定される上林湖越窯跡群を含め、該当窯跡から出土した器形およびそれを模倣する青磁の総称として、用語の定義を明確にした。

第二章では、初期貿易陶磁器の研究史のうちでも、主に分類・編年、消費、模倣関係に関する研究を整理した。その中で、生活の上で重視されてきた全体形状が考古学の従来の分類研究に取り組まれていないことを説明し、他の検討への発展性を制限したことを取り上げた。そして、本論文で越窯系青磁を主とする研究の方針をここで確認した。

第三章から第六章までは、一連の検討として、分類体系の再編を試みることにした。第三章では、現在までの分類研究に使われる要素と根本とする概念を再検討した。胎土と釉の質や高台形態を重視する現行分類は、精粗差を重視した釉薬中心の二区分体系と、産地差を重視する胎土中心の三区分体系に分けられる。従来の分類案によって、産地の区別を含む編年研究および精・粗の製品差による分布状況の解明には大きく貢献した。確かに、日本では、比較的精良な胎土をもつ越窯製品以外に、粗雑な胎土をもつ他地域産青磁も出土していたため、製品の精粗差や産地差を見極めるのが最初の課題になったのも必然的なことである。しかし、在地社会において容器が機能差や外見差によって如何に受容されているのかを解くために、器形を主とする分類体系の必要性を論じた。

第四章では、器形を重視する分類体系の組み立てを前提として、従来の分類案が分類系統に不安定さがあり、適する研究視点が限られている点と、型式細分の不足や分類内容の不明瞭さなどによる再現性の乏しさなどを指摘した。その上で、大分類・中分類・小分類という区分により、各分類案の階層的な体系を明らかにしながら、機能やデザインに関わると考えられる体部形状、口縁部形態、および生産地と編年を表現しやすい高台形態という点に着目して分類し、全体的な器形に対する視点から型式再編を行う方針を定めた。

第五章と第六章では、それぞれ青磁碗と青磁皿に対して実際の型式分類作業に入った。その型式分類に関しては、形態のみならず法量と対照しながら、区分の妥当性を検証するとともに、年代的な変移を表現する４式に分ける形で整理した。第七章では、紀年墓から出土した遺物と対照しながら、各型式が生産される実年代を推論した。

第八章は、第五・六章の型式分類と第七章の年代観検討の成果を基づいて、さらに青磁の碗皿において釉薬、口縁部装飾の輪花技法、体部装飾の文様や窯詰め方式を表現する目跡に関して、編年的差異およびそれぞれの型式に認められる特徴を明らかにする。そして、異なる型式の間で生産コストの差が存在すると判断した。このコストの差を実証するために、中国においての消費様相を分析した。全型式の碗が副葬品として出土しているが、出土量に顕著な差異が認められることを指摘した。また、被葬者の身分を考え合わせてみれば、一般的な庶民と正式な官職を持たない臨時職を担当する者は、各型式の碗を平均に使っていたが、官職をもつ被葬者は、ほとんどが生産コストの高い碗だけを使っていたことがわかる。このように、型式により受容層の差を生んでおり、そこにはおそらく価値の差、質的な差違があると判断した。

第九・十章は日本において越窯型青磁の消費様相を検討する。まず第九章では平安京において消費様相の特色を明らかにし、第十章では第二の大都市である太宰府における分布状況を明らかにした。これらにより、九州と本州の差、および政権中心地である近畿と大宰府の差を検討した。次に、平安京と大宰府の宮都遺跡における内部の分布差を明らかにする。そこで、器種と型式の多様性、時代差から消費構造が伺える。上層階級は優品が多いが粗製品もある一方、多くの器種・型式を入手できる様相が認められる。型式の多様性、および型式の分布傾向は、社会上層の人が流通を把握していたこと、価値があると認める型式を明らかにした。

最後の第十一章は、型式分類の成果を基づく空間分布の分析結果を扱い、その消費様相に現れる文化の独自性について論じた。まず日本国内においては、分布上では優品と粗製品の二元的な差を反映するのではなく、器種と型式の多様性、さらに質の精粗の様相差などから、社会構造の差異をみいだした。そこでは、先買権を通じて使用階級の差異が再生産されるような消費構造が想定できる。次に視点を生産・流通までの一連の過程に拡大すると、日本が選択した品目が認められることも指摘できる。越窯系青磁と日本産緑釉陶器の組成は「外的唐風、内的和風」の食器秩序だと判断した。そして、中国製品を模倣したとされる緑釉陶と越窯系青磁が日本において衰退していき、貿易陶磁器を公的管理から外していく。その過程は、唐風の志向が退き、食器秩序が変化することを表す。すなわち「内外和風化」の一環として理解できる。その後に登場する中世陶磁は、社会構造を演出する場から離れ、より自由な貿易によって日本において普及していくため、初期貿易陶磁と異なる役割として日本社会に受容されることになった。

従来の研究では、９～10世紀にける貿易活動は、当時において強盛な国家である中国（唐・宋）が主導して輸出する品物を一律的に規定したものであり、各国は単純に受動的な立場だという考えが、かなり普遍的な認識として共有されているようである。しかし、本論文の分析に基づけば、一律的な受容は想定しがたい。むしろ消費行為にも受け入れ側の社会文化環境が影響しており、地域文化の独自性が表現されていることを実証することができた。また、律令制に基づく奈良時代から、平安時代を経て中世の体制へ変容していく時期において、貿易活動もその時代の様相を反映していた。以上の通り、本論文は、中国の越窯系青磁を材料に検討することを通して、中国と日本との貿易実態の一端を解明するとともに、そこに経済や文化などの諸側面を視野に入れて歴史的な意義を導き出した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　盧　柔　君　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	高 橋 照 彦
	副 査　大阪大学　教授	福 永 伸 哉
	副 査　大阪大学　教授	藤 岡　穣

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　唐宋期越窯系青磁の研究

学位申請者　　盧　　柔　君

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　高 橋 照 彦

副査　大阪大学教授　　福 永 伸 哉

副査　大阪大学教授　　藤 岡　　穣

【論文内容の要旨】

陶磁器生産において、中国は言うまでもなく世界的にみても早くに卓越した技術的発展を遂げた地域であり、とりわけ晩唐期、９世紀以降には、朝鮮半島や日本列島をはじめ東南アジアからさらに広く西方へと中国産の陶磁器がもたらされている。そのような晩唐期から北宋代初めにかけての初期の貿易陶磁器を生産した窯場としては、現在の中国浙江省の東北部に位置する、いわゆる越窯（越州窯）が最も著名である。

本論文では、上林湖窯をはじめとする越窯の中心地とその周辺で生産された類似する一群の青磁類（「越窯系青磁」と総称）を主な対象として、その生産が盛んであった晩唐前後から五代十国期（呉越）、さらに北宋の初期段階頃の時期に焦点を当て、その生産と流通の実態と特質などを明らかにしようとしている。本論文は、全体が 11 章から構成されており、分量では 400 字詰原稿用紙換算 440 枚、図は 87 枚、表は 50 枚となっている。

まず第一章の序論において、越窯系青磁を含む初期貿易陶磁器の定義や全体的な様相などを確認し、第二章では初期貿易陶磁器の研究史と課題を整理した。第三章では越窯系青磁の問題に絞り、なかでも青磁の分類方法をめぐる既往の研究の再検討を試みた。これまでは、産地差を識別する目的で胎土の分類を重視していたり、時期的な変遷が見いだされる高台などの要素を重視したりしてきたが、機能の上で使用者にとって最も注目されるはずの全体形状が十分に整理されていない点を問題視した。

第四章では、青磁の新たな分類の基準設定方針を述べ、共通の指標により大・中・小分類という形で階層化することによって網羅的な形状の分類が可能になることを主張した。第五章・第六章では、越窯系青磁の椀類と皿類のそれぞれについて、窯跡出土品などを主な基準資料にして具体的に新分類を詳述するとともに、口径・底径・器高や体部の傾斜度などの計測値をグラフで示すことによって、新分類の適切さを確認する作業も行った。さらに第七章では、紀年銘資料を有する中国各地の墓からの出土品を集成することにより、それぞれの分類の年代観について論じた。これらの検討によって、越窯系青磁の新たな分類と編年の案が示されたことになる。

続く第八章では、分類された碗皿類をいくつかの要素から横断的に比較検討を試みている。具体的には、口縁部に変形を加える輪花技法、刻線などによる体部の装飾文様、底部にのこされた窯詰めの際の道具痕（目跡）などに注目することによって、異なる形状の碗皿類に生産コストの差が生じていることを導き出した。その差違は中国内での墓においても被葬者の階層差などと対応し、品質の差が実質を伴う点も明らかにした。

さらに第九・十章では、越窯系青磁類の流通に関するケース・スタディーとして日本での消費状況の検討を試みた。とりわけ、平安京内と大宰府条坊内における出土データを詳細に集成し、上記の分類・編年案を適用するとともに、出土地点の性格との連関、流入量や伝世期間の時期別変遷などを追究した。

最後の第十一章では、主に第九・十章の成果をふまえ、最も高級ともいえる器形が日本にはあまりもたらされていないこと、茶碗に相当する器形をより好んで受容していることなど、日本側での選択の様相とその背景を論じた。そして、従来は中国側が主導的に輸出品目を設定したという意見もあったが、むしろ輸入側の独自性を重視すべきだと主張し、貿易陶磁を通して経済・政治・文化などの諸側面にも論及した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、越窯系青磁の碗皿類を網羅的に分類しなおして新たな試案を提示し、これまで細かな検討が行われていなかった数値的なデータをもとに再整理したことは、基礎的な成果として評価できる。また、中国での紀年墓などの集成に基づき、これまでよりも細密に編年案を示したことも、貴重な研究内容となっている。加えて、文様をはじめとする装飾の技法や焼成時の技術の痕跡などを比較検討することにより、碗皿類の中に品質の差違が存在することを明確化したことも、分析視角の上で意義深いものである。

さらに本論文の後半では、日本での出土例から製品流通の実態を追究しているが、平安京や大宰府地域を対象地域にして流入・消費の様相がかなり具体的に明らかになったことも重要な成果である。消費された地点の性格差によって、優品の多寡や多様性の有無などの差違が読みとれる点、青磁の日本への輸出量が時期的に変遷する点、青磁の製作時期と廃棄時期の差から使用期間を推算し、形態分類差による扱われ方の差違なども抽出できる点などが明らかとなり、これまでの諸研究に修正を迫っている。

もちろん残された課題もあり、個別事実を統合する形で越窯系青磁の生産と流通の歴史的背景について説明付ける上では検討が不足している。また、平安京・大宰府以外の日本の各地や日本以外の諸地域を含めた考察、碗皿類以外に壺類をはじめ特殊器種も対象とする検証など、確固とした結論に導くために深めるべき課題である。

そのような課題は残るものの、視角的な新しさやその方法論、集成に基づく個別の成果などについては研究の意義が高いものであり、今後の越窯系青磁研究の指針ともなりうるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。